

て牡丹江に着いてみると前進できなくなり、そのうちアミーバ赤痢にかかったり一層の苦痛が重なり半死半生の姿で牡丹江からハルビンに戻った。この間二週間だったが、もしおき去りにされたら今日の小林が無かったと語る彼は泣いている。

ハルビンでは訓練所のあった部屋に寝泊まりして市内の満州人の商店の使用人、羊飼いの使用人、材木屋の運搬人などで働いて一日五円をもらって生きていた。その後、八路軍につかまされた。口説かれて八路軍人になった。二十一年四月から隊長付きだったので訓練は無かった。八月になったら、我々はハルビンを引揚げから、貴殿は日本へ帰った方がよいと言って、中国服と五百円のせん別をもらった。

小林氏はハルビンからコロ島について、運よく乗船し、博多港に上陸、毛布一枚と下駄一足の支給をうけて故郷に帰って両親兄弟と泣き笑いの感激である。

三か月ほど静養して大津の東洋レーヨン会社の社員に採用となり、定年まで三十有余年つとめた。

日本民族永遠に発展するために、どんなことがある

うとも二度と戦争をしてはならない。

生と死が一緒に住む極限の社会生活を切り抜けられるのは真があればできるという体験は貴重なものと思う。と誇りをもって語る言葉を力強く承った。

(他)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城吉之助)

風雪流れて四十有余年

愛知県 奥村 数夫

昭和九年の初春三月三日であった。美濃太田駅から四人の同僚と共に多数の職員に激励されて勇躍神戸港に向かった。当日埠頭に集結した名古屋鉄道局管内職員は、総数千八百人ほどであった。それぞれ青年職員は誠に意気旺盛で、大陸滿蒙の鎮護者ならんと大志を抱き、岸壁に横付けされた真っ白な巨船に乗船した。埠頭まで父が見送りに来てくれた。しばしの別れを惜しむ。父はいかにも寂しそうで無言のまま私の手を堅

く握りしめてくれた。今は亡き父のあの手の暖かさがしみじみと思い浮かばれる。ドラの音を残して岸壁を離れる時、父の姿も遠ざかりまた六甲の山々もかすんで来た。自分もまたいつの日にか再び両親と再会出来るかと思うと寂しく、知らぬ間に涙が頬を伝い胸のふさぐ思いだった。船は静かに瀬戸内海の航海を終わりに、玄界灘に差しかかるころから物凄い暴風雨に遭遇し、船は止むなく朝鮮半島の木浦港に避難した。この予想もしない出来事により、予定の航海が遅れて五日ほどを要して大連港に到着した。

上陸後市内のホテルに分宿、一昼夜の休息をとり翌日午後より千八百人の赴任者に辞令が伝達される時が来た。故国日本を出発する時、着任地は一切明示されておらず、勤務地は不明のままだった。今ここで北満のソ満国境の辺地にでも勤務を命ぜられたら、今更どうしようも無く心配で不安がつもののみだ。いよいよ満鉄本社の職員から各人に辞令の交付が開始された。ハルビン、チチハル、牡丹江など北満の各鉄道局勤務者が多数で、未発令者はわずか六十人ほどになってし

まった。

不安と心配で胸の鼓動も激しさを加え、身の震えさえ感ずるほどになった。やがて職員より残存者は全員奉天鉄道局管内勤務の旨が伝えられ、辞令を受領して見ると大石橋機関区と明記されている、なれどその大石橋機関区の所在地がどこか分からず、不安の思いを押さえて職員にその方向と位置を尋ねると、大変親切に地図を示してこの大連市より急行列車で二時間ほどのところであり、日本と言う町に相当する街で満鉄の重要な現場機関が設置されており、日本人も二万有余人が在住しておると説明され、又一緒に赴任した四人共機関区勤務で、本当に飛び上がるほど嬉しかった。お互いに手を取り合って喜び現地に着任すると、一緒に来た見知らぬ人から私は多治見機関区から、また一人の人が高山機関区から来たのでよろしくとあいさつされるので、ますます力強く安心感を抱いた。

皆そろって同じ独身寮に入居して元気で一か月の現地訓練を受けた後、当時世界にその名を知られた超特急「アジャ号」に乗務して、大陸横断の夢もかなえら

れ毎日が本当に愉快な楽しい勤務だった。北は奉天市また四平街まで、南は大連市まで、夢に見たあの大陸を突っ走った当時、あの豪華な「アジヤ号」の勇姿は一生忘れられない。業務にも慣れて元気で楽しく勤務している時、突然機関区長より出頭命令に接し転勤かと心配して区長室に出頭すると、区長より君は商業学校出身者で、体つきから判断して苛酷な機関車乗務員より事務職が最適と思われるから速やかに転職するよう要請があり、やむなく夢も破れて事務職に転職してしまった。

昭和十年八月内地の親もとに残して来た家族を迎えに帰国。一週間ほど滞在して家具や衣類などの発送を終了して、妻、長男の寛治、二男の信也の三人を同伴して再び大石橋に帰り、満鉄社宅に入居家族そろって楽しい生活が始まった。大石橋街は北に省都奉天市まで急行列車で一時間半ほど南大連市まで急行で二時間ほどの地であり、南満州のほぼ中央に位置し又営口線の起点でもあり、その営口市へもわずか三十分足らずして行かれる。

街は満人の居住区の旧市街と日本人の居住区の新市街とに別れ、日本人は約二万有余人居住していた。大石橋街は本当に恵まれた静かで平和な街で、渡満以来家族そろって健在で十年有余を何の不安も心配ごとも無く楽しく過ごした。

戦争が日増しに激しさを加えた昭和十八年四月、突然大連埠頭局経理部へ転勤を命ぜられた。戦争の状況が悪化し厳しい日常の中を家族同伴で赴任すれば、関東州の最先端にある大都市大連市は海上から攻撃や空爆にでも見舞われたらその危険度は極めて高いので、そのような状況を考慮して差し当たり単身赴任して独身寮に居住することにした。当時満州において、南方の日本軍の戦況不利やまた日本内地の空爆状況、物資の欠乏などの暗いニュースが後から後から伝わって来た。

昭和二十年五月、六月に入ると戦況の報はますます悪化の一端をたどり、毎週土曜日には大石橋の家族のもとへ帰っていたがそのような猶予も得られなくなり、局の重要担当業務に忙殺されておりました。戦争もい

よいよ最終段階を迎えたように思われ、自分も多くの同僚と同じように明日は令状が手渡され、北滿の辺地に送られ、連軍と一線を交え、大石橋に残した家族とも会えずして大陸の野露と消えゆく身かと思うと、本当に胸も裂けんばかりの悲しさと寂しさに打ちひしがれて、ただ一人昼食の食堂に向かった。

戦時中苦難の道を歩んで来た日本国民は、昭和二十八年八月十五日は、生涯忘れられない悲しい日として心に深く残る傷跡と思われる。八紘一宇神州不滅の聖戦と言われた大東亜戦争も、ついに利あらずして王道楽土建設の夢も空しく思わぬ終戦の悲運に打ちひしがれてしまった。いとしき妻子と別居中の大連独身寮で終戦の日を迎えた。

日本の戦況不利の状況が暗い重苦しい空気に包まれていたところへ敗戦の報が伝わるや、昨日までの強力な軍隊並びに治安に力強い権力を維持していた警察も一朝夕にして崩れ去り、その権力も威力も消え去り今となつては何の施す術も無く、今日まで寝食を忘れて頑張つて来た日本人は、この異国の地でただ茫然と立

ちすくむのみである。

十六日早朝から市内は騒然と様変わりして危険度が身に迫つて来た。今のうちなら外出も可能の様子なので、同僚と急遽男子職員三十人ほど集合して四階経理部の東側の窓を開け放ち、波静かな黄海の遥か東の彼方、美しい青空の下に在る祖国日本の安泰と親兄弟の安泰を祈念した。

二十日有余も過ぎたかと思うころ恐ろしい暗い市内の混乱も少し影をひそめて来たので、この機に乗じて何としてでも家族の待つ大石橋へ帰る決意をして駅へ出向いた。八月九日のソ連軍が満州に侵攻して以来、北滿の各地に居住していた多数の人々が、毎日毎日南滿のこの大連市へ避難して来る。難民が後をたたない状況で、これらの多数の難民は何万何千万とその数は計り知れない。自分が駅へ出向いた時も丁度避難民を乗せた二編成の列車が到着していた。列車を降りて駅前広場に出て来る人々は、手荷物一つ無く裸同然で中には身に麻袋をまとい靴も草履も無く素足の人も多く見られ、その姿は誠に気の毒で痛ましい哀れな姿であ

る。体力も消耗しつくした人々の顔は、血色も無く疲労の度がありありと浮かんでいる。食糧らしき物も無くただ生きて無事避難して来たと言うだけの、本当に哀れと言うか表現の言葉すらないほどの痛ましい人ばかりである。

二時間足らずの短時間で帰宅出来る大石橋へ、不安と恐怖にかられて乗り換え乗り換えの昼夜の長時間を要して、本当に死にも狂いでようやくにして大石橋駅へたどり着いた。降車して眺むれば、ホームから駅舎まで多数の避難民があふれている。大連駅で乗車前に見たと同様悲惨なありさまである。再び身に震えを感ずる状況である。帰宅途中小学校公会堂などすべての公共施設を眺めると、どこにも避難民があふれている。本当に惨たんたるありさまである。これら多数の難民の人々を目にして、もしや我が家の妻子もこの人たちと同様どこかに避難させられておるのではないかと想像し、また何とか無事で自宅にいてくれたらと痛む思いに祈りをこめて、あせる気持ちを押さえながら疲れた足を引きずり自宅に急いだ。

そのころ東の空が明るさを帯びて来た。無事帰宅できた喜びで力強く玄関の戸を叩いたが、何の応答も無いので裏へ回り炊事場の戸を叩いても玄関同様何の応答も無いので、もしかしたら街の指示に従いどこかへ避難させられておるかと思い、心配と不安は募るばかりで今度は寢室の窓下に回り硝子戸を力強く叩き、大声で「お父さんだよ、お父さんだ。」と二、三回呼ぶとようやく分かり安心したのか玄関の戸を開けてくれた。安心と空腹と気疲れが出たのか、体がにわかにくたたりして上へあがる気力も失せてしまった。子供たちは力強く戸を叩く音に怖さを感じ、頭からフトンをかぶり息をこらしていたが、毎日毎日待ち続けたお父さんと分かると急に飛び起きて走り寄り、いかにもうれしそうに抱きつき笑顔で満足していた。恐怖の日夜を家族がどんなに待ち続けたことかと思うと、自分も子供同様うれしくて涙が流れるほどだった。

妻子六人共皆そろって何の異状も無くして待っていてくれて本当にうれしかった。帰宅の道中余りにも悲惨なありさまを眺めてしまった自分には、何にもかえ

難いうれしさが胸につかえる思いであった。また家には北滿よりの避難者三人の女性が同居しておられた。事情を聞くと、涙ながらに公共施設は超満員なので各社宅に分宿させられた旨を語られた。大石橋に一時停車して五日ほどの休息を得て、再度南下の異動が発令され、ゆっくり休養するほどの日時も与えられずして、再度関東州大連方面への異動が開始され、三人の女性も涙の中に感謝の言葉を残して別れを惜しみ、避難列車で南下された。

大石橋も大連市と同様、ある程度の暴動も発生して激しい略奪で街も一時は騒然とした形相を呈したようであったが、田舎の街ゆえ思ったほど強烈な様子でも無かったようで、街も社宅の人々も割合平静を保っていた。でも不安の日が続く十月初旬ころ、中央軍が進入して来て司令部が設置され街の治安に努め始めたので、街の中もようやくして平静を取り戻して来た。そして心配も不安も恐怖心も無く、外出できるような明るい時を迎えた。

折しもその司令部より満鉄職員は許可なく無断で職

務を放棄する者は嚴重に処分する旨が布告されたので、取りあえず元在勤の機関区に出勤した。二か月ほど出勤し、作業の手伝いをしても給料の支給もなく、生活は追い詰められ明日の食事にもこと欠く最悪の状態におち入り、なす術も無くなった。そこで満人の農家か満人街の小さな手作業をする工場へ働きに出て、わずかな賃金か満人の主食コーリヤンか、ヒエでも得るやり方法はない。

また、家庭の主婦は日本に持ち帰ろうと大切に保管していた貴重な所持品は家具衣類を満人に売り払い、わずかながら現金を得ていた。それでも生活に追いつかず、妻は隣の奥さんと協力して駅前広場の片隅でゴザを敷いて満人相手に小田巻を売っていた。その姿を見ると余りにも不憫で涙が流れるほどであった。

大陸滿蒙の広野から玄界の空高く流れる雪は、故国日本の空へ静かに流れゆく。いつも静かな空を仰ぎ見てあの雲に乗れたらと涙した。新年だ正月だなんて異国で金も食料も無い現世からは最早脳裏にその面影も無い。とにかく何とかして家族一同そろって故国日本

へ帰りたい一念のみである。毎日二十度二十五度の寒さをよく耐え忍んだ。少し初春らしき三月を迎えた。終戦を境にして社会生活環境も百八十度天と地の変わりが様まことに哀れな日本人の日夜の明け暮れの毎日だ。今更名誉も地位もあつたもので無い。

四月を迎え盤竜山の樹々に、また街中の並木アカンヤの樹にも春の訪れを告げるかのごとく新芽が吹き出してきた。この時期を迎えるや居留民の間に、日本人の引揚げが開始されたそうだとやううわさが流れ始めた。自分たちもうわさだけでなく、やがてはいつの日にか引揚げの順番が必ず訪れることを夢見て石にかじりついてでも生き抜かねばならない。このような待ち続けたうれしいニュースが流れ始めてから希望も持て、幾分心に明るさがよみ返つて来た。

大石橋の居留民にもいつうれしい引揚げ命令が伝達されるか分らないので、一応その日のためにと思ひ妻が五人のそれぞれ背負い袋を作り始めた。寛治、信也、幸雄にはそれぞれ少々の日用品とわずかながらの食糧を入れる小さい袋を、自分と妻は引揚げ道中にお

いて万が一にも野宿を余儀なくされた場合を憂慮して毛布、衣類、日用品を入れる大きな背負袋を作り、いつ引揚げ命令が出て心配のないよう万全の準備をして引揚げ命令の一日も早からんことを祈り続けた。一年生の郁子は赤ん坊の昭子を背負うことにした。

何とか生きのびて春を待ちたい、切々たる望郷の思いで待ち続けた春も束の間に過ぎ去つた。大陸特有の夏は本当に暑い。このような身軽な夏にも引揚げが出来れば着用衣服も簡単に軽くて済むし、又野宿を余儀なくされても寒くなく総ての都合がよいので何とかこの夏に引揚げをと神に念じてきた。四月ころに引揚げのうわさが流れ始めてから、衣類、家具類、寝具などの大半は生活のため手放し売り食いして来た。今もし再び厳しい冬と対決ともなれば食糧はもちろん燃料の入手も出来ず、かわいい幼子を犠牲にせねばならない。ただでさえ暗い大陸の冬、敗戦国民の異郷における身の辛さ、本当に胸は裂けんばかりである。この満州でまた厳しい冬を過ごすなど考えてみるだけでぞつととして身の震えを感じる。最悪の恐ろしい事態が襲う

や知れず、最早運を天に任せて自然のなりゆきを見守るより致し方も無い。

七月も半ば過ぎたころの美しい晴れた早朝、突然内地引揚げの吉報が町内に伝達された。この一年間まともにも眠った日が無く、水を得た魚のごとく生気をよみがえらした。戦前二万人有餘在任していた大石橋も、避難民を含め五万人有餘となったが、自分の在任していた紅旗街は、引揚げの第一陣に指定されて、幸運中の幸運であった。また家族一同多少の栄養失調になり少々衰弱していたが、引揚げに支障も無い状態でそれが何より恵まれていた。引揚げの時期が念願の夏で本当にうれしかった。

八月七日、大石橋の居留民第一陣として出発が決定して、準備に忙殺されて来た。又本部より帰国に際して所持する金品の指示注意書、身分証明書も発行交付され、各町内の部隊編成も完了した。八月六日、最後の家財整理に取りかかったが、目ぼしい家財は片っ端から満人に売り払い生活費に当てていたので、金目の家財として何一つ残っていなかった。夕刻家族そろって

最後の食事を終わり、帰還道中の弁当を作ったり内地に持参するわずかな大切な金を腰帯に縫い込んでいる最中に、三、四人の暴民に襲われ家財最後の一枚のフトンまで強奪されてしまった。その夜は一睡もなし得ずして暴民再度の襲来を警戒して大切な品物を枕元へ置き、七人家族懐かしい大石橋最後の夜を畳の上でゴロ寝した。

明けて八月七日、我々の帰国を祝福するかのごとく天気晴朗にして誠にすがすがしい朝を迎えた。大石橋居留民第一部隊として出発の日だ。あらゆる苦しみ恐怖におびえて待ちに待った今朝こそ祖国に向かって出発する本当にうれしいよき日である。どんなに今日を待ち続けたことか、うれしさと喜びで涙が頬を伝う。

十年余を平和で明るく楽しく住み慣れた社宅に別れを告げて、寛治、信也、幸雄にはそれぞれ日用品や食料を入れた背負袋を背負わせ、一年生の郁子には赤ん坊の帽子を背負わせ自分と妻は衣類毛布日用品を入れた大きな袋を背負い駅に向かった。

今日の引揚げを知った多数の満人が道路の両側にた

むろして、石を投げたり、痰をかけたたりして声高に笑い、隙あらば子供たちの背負袋を奪い取ろうと待ち構えている。自分は子供たちの前に進み出たりまた後退しては妻子に注意して、また激励し助けながらようやくにして駅にたどり着いた。

駅前広場には既に多数の人々が集結していた。二次三次の帰国順番を待つ人々、知人友人の見送りでごつた返して、悲喜こもごも別れを惜しんで、送る送られる人涙々の渦に包まれた。午後三時ころ多数の引揚者は無蓋貨車への乗車が完了した。今無蓋貨車に家畜同様座る場所も無いほど多数押し込められて送還されるとは、夢か現実か思わぬ人生の皮肉さをしみじみと身に感ずる。

機関区在勤当時懇意にしていた数人の満人が日本人の群衆と離れた片隅に姿を見せて、「オーソン、オーソン（奥村、奥村）」と声を大にして名を呼びつつ手を振り、いかにも懐かしそうに見送ってくれた。大石橋を去るに当たりこのようにして見送ってくれた満人の姿は、生涯忘れ去らない。大石橋よ永遠にさようなら。

無蓋貨車で編成された引揚列車は大石橋を離れ懐かしい海城市や湯岡子温泉駅を通過し、製鉄の都鞍山市を通過遼陽市に到着した。無蓋貨車のため便所も無いので、停車すると婦女子特に子供たちの排便が大変である。貨車から降車乗車の手助けは男子の重要な作業の一端である。また、引揚列車が駅に到着すると、どうして、また、どのようにして知るのか多数の満人が列車の近くに押し寄せて、少しの隙あらば荷物や乳幼児を強奪しようとする様子を窺っている。

大人の男性は皆が協力して警戒を厳重にして難を避けるのが精一杯のありさまだ。妻は栄養失調で、昭子に与える乳が思うように出ないので、列車が停車すると同時に自分の身を顧みず貨車から貨車を渡り歩き、母乳を求めて与えるのが唯一の仕事で、懸命に渡り歩いている。小さな赤ん坊一人でも助けねばと、それこそ自分を捨てて本当に文字通りの命がけである。このような状態を繰り返して、蘇家屯運河を経て、午前二時ごろようやくにして奉天市に無事到着した。

引揚列車が各地より奉天駅に到着すると共産軍が必

ず交通税を徴収し、その持参金の額により列車の先発後発が決定されるとの情報を、我が幹部たる人が前もって受けており既に準備しておられた。当時の金で三十一万円の大金を提供されたので、先着の列車より早く出発が出来たのである。幹部のなみなみならぬ御尽力に感謝して、一同大変な喜びようであった。大石橋の難民を乗せた列車は九日昼過ぎ、道中何の受難もなくして予定の熱河省錦州市郊外に在る収容所に到着した。

停車場は収容所へ行くために停車する場所で、駅舎もホームもない名ばかりのところ、列車はここに停車、停車した全員ここより約一里ほど北方にある元日本陸軍航空隊錦州基地の旧兵舎に収容されることになり、酷暑の真昼に大、中、小隊ごとに隊列を整え、隊旗を先頭に収容所へと行進を開始した。その行進も遅々としてはかどらず、各隊の役員は前へ後へと走り叱咤激励して二時間ほどを要し、炎天下の畑道をようやくにして収容所に到着した。

各班ごとに部屋が割当てられ入居したが、既に先着

者が七万人も収容されており、そのけんそうと賑やかさは驚くのみである。また乞食が大集団部落を作って住み込んでいるかと思われるほどだ。これら引揚者は入れ替り立ち替り順次コロ島の港へ送還されて行くのである。到着後二日ばかりして持参して来たチマキ弁当、子供たちのオヤツも飲み物もついに底をついてしまった。いよいよ収容所で支給されるコーリヤンやアワの粥を食べるより方法もない。夜間は子供や女性を広い部屋の真ん中に就寝させて、男子たちは全員廊下や窓の下の土間などで横になり、部屋の荷物、娘子供たちを拉致されないよう、極力事故防止に懸命だ。又交替で不寝番につき巡回した。

外部からの暴民の侵入のみに気をうばわれている中に、同胞間で他人のわずかな大切な所持品に手を出す不心得者が始め、何と心無い仕業だろうか。これが同じ祖国日本へ帰る身の同胞の行為かと思うと本当に腹が立つ、情け無い悲しいことだ。今になって全く油断も隙も無いありさまと化した。又収容所には炊事道具が一つも無く、日常生活にはほとほと困難を極めた。

持参した重箱で洗顔、その重箱で粥の配給を受け持参した三個の碗で交互に食事を取り終われば、その重箱でハンや碗を洗い、重箱で各自のシャツ、パンツ、ズロース、赤ん坊のオムツを水洗いする。誠に不潔な不衛生な日々である。また浴場の設備も無く、入浴も忘れるほどに長く絶えているので、収容者は誰も彼もシラミに悩まされた。

明日の帰国を夢見て万難を乗り越えてこの錦州収容所によりやくたどり着きながら、疲れ果て力つきて病死する人、栄養失調で骨と皮ばかりになり衰弱が激しく動くに動けず身は細り失命する老人、また精神に異常を来した人、また手術を必要とした急病患者、出産を目前にして苦しむ中年の婦人も出て、診療所無く医薬品の保管もなくすべて手の施しようも無く、本当に悲惨な生地獄である。

これから先幾日この収容所に留置されることやら分からず、思えば思うほど心細くなり幼い子供五人をかかえて本当に身の細る思いである。収容されて四週間ほど過ぎた日、私たち大石橋部隊に突然帰国の送還命

令が伝達された。誤報だと騒いでいる時、本部より早く準備して広場に集合するよう命令が出て、初めて皆がその真実を知り一同大喜びして互いに手を取り合って天に届く程の喚声をあげてうれし涙、涙であった。

大陸特有の暑い真夏、太陽はさんさんと照り続いている昼過ぎ、再び隊列を整えて、コーリヤン畑の中の細い道を、仮設停車場へと行進を始めた。停車場に到着したが我々大石橋部隊の乗車するそれらしき列車の姿は見られず、やむなく各自背負った荷物や子供を降ろして炎天下の中を四時間ほど空しく過ごした。致し方もなく疲れている時、遠くより汽笛の音が聞こえてしばらくするとコーリヤン畑の彼方からようやく列車が姿を見せすべり込んで来た。列車が停車すると又多数の引揚者が下車させられ、隊列を整え我々が歩いて来た道を収容所に向かって行くのである。ようやくにしてこの空車に乗車して目指すコロ島に向かって発車した。既に赤い大きな太陽は広野の西に傾き始めた六時ごろだろうと思う。

錦州駅へ到着したのは夜八時ころであった。しばらく

くして駅より当列車は今晚当駅に止まる旨の通告に接し、またか同一不安にさらされた。やむなく男性より降車して婦女子子供たちの排便などに手をかし、再び荷物の強奪や幼き子供の拉致に備え万全の配置に就いた。皆が協力して一体となり警備していたのに、ほんのちょっとした隙に乗じて四個ほどの荷物が略奪される事件が発生した。一晚中闇夜の中を監視に当たり、一睡も出来ずしてとうとう朝を迎えた。九時ごろによりやくにしてコロ島に向かって発車した。途中各駅に停車し、その上ノロノロ運転で目的の駅に到着した。しかし乗船する港駅までまだ少々の距離があり、その上夕刻なのでまた今晚はこの収容所で一泊休養して明朝港駅へ向かい乗船することに決定されたので、止むなくここで下車して収容所に向かった。

まだ雨もやまず雷鳴もゴロゴロとひびいている駅に着いた時に、ほとんどの人たちは既に乗車完了して発車寸前の危ういところだった。多くの人々の助けを得て急ぎ妻や子供を乗せ自分も貨車に飛び乗った。待つ時間もなく列車は港に向かって発車した。本当に間一

髪の危ういところであった。早朝列車は大陸最後の地、コロ島駅へ無事到着した。空腹と暑さとノミと垢と雷と豪雨との波乱万丈の生死をさまよい、誠に悲惨な長い長い道中だった。下車して埠頭の広場に整列するころ、夕べのすごい雷鳴を伴った豪雨は本当にうそのように美しく晴れ上がり、強烈な真夏の太陽が照り始めた。

十一時を過ぎたころだろうか、本国から引揚船に乗船して来た政府の係官らしい人と中国側の係官との間に引揚者の引揚調印が交わされた様子で、ようやく昼過ぎたころ乗船が開始された。我々の引揚船は仮設空母熊野丸一万吨級の船だった。甲板中央の柱に先ほど眺めた日の丸の国旗が眼にしみるように映り、引揚者一同万感胸に迫り仰ぎ見た。ああ故国日本の旗だ、生まれ故郷へ帰りたい、だれも彼もうれしさにあふれて手を取り合って喜んだ。昨日までの悲惨な苦勞を忘れたかのごとく笑顔に満ちている。国旗は翻り天空の美しい雲は故国の空へと流れている。

船室は驚くほど広い。自分たち家族はその中央に席

を割り当てられた。席に着くや早速腰紐やバンドまた帯などを結びつないで物干し代わりに引っ張って、濡れた衣類や所持品を干して家族一同その下で横になった。待つ間もなくして乾パンと一碗の汁が配給された。

二日間で二度食事を口にしただけで生きて来た空腹には、この乾パンと汁のうまさ、本当に忘れ得ないすばらしい美味の食事だった。久し振りの満腹で乗船した全員まるで死人のごとくに深い眠りに落ち入った。

五、六時間過ぎたかと思うころ、ふと眼をさますと横になっていた床下で、ゴーゴーと船のエンジンの音が体に感ずる。故国の風景が懐かしい父母の姿が臉に浮かんで来る。自分ほうれしさと早く故国の土を踏みたい一念で起き上がり、一人でデッキに上がって見ると既に多数の人々が、懐かしそうに永年住みなれた第二の故郷大陸滿蒙の山並みや大空を祖国に流れる雲を見つめて、親兄弟たちの懐かしい再会を心に描き立ち続けている。

雲は船と共に走る。玄界灘の涼しい風はボサボサの頭髮と、伸び放しの頸のひげをなでて去りゆく。何と

かして生きながらえて本当によかった。万が一にも五人の愛児のうちもし一人でも大陸の地に残してはと、日夜寢食を忘れて頑張った甲斐がむくいられて本当に喜びに堪えない。

航海中に今祖国を目前にして船内で力尽きて四、五人の方が亡くなられた。引揚船が日本を出発する時準備してきた古畳と鉄兜を積み込んで来ているので、死者はその古畳に寝かせて幾重にも紐でしばりつけ片方に鉄兜を取り付けて船は停船し汽笛を鳴らして、多数の人々が甲板上に並び合掌して見送る中を海中に投げ込まれる。その遺体は畳と共に渦を巻き海中深く沈み行くのである。本当にかわいそうなことである。

大陸滿州を出発して十八日目、昭和二十一年八月二十三日、広島県大竹港の沖合に停泊した。目前に故国の美しい山河を望み、今までの毎日毎日わびしい悲しい涙もうれしい涙と変わる。伝染病や悪疫防止のため四日間を沖の船中で過ごし、二十七日ようやくにして上陸を許可され、故国日本の第一歩を力強く踏みしめた。引揚者一同の喜びよう、うれしさに満ちた明るい

顔々、今にでも天に飛び上がるかと思われるほど喜びにあふれている。

十年有余を満州の地で辛苦を共にして来た親友知人との別れの時が訪れた。互いに手を取り合い抱き合い、またいつの日にか再会を約して西に東に別れた。あれから風雪四十有余年の歳月は夢のごとくにして過ぎ去り、今やまた再び大陸滿蒙の地に黎明の灯が輝き始めた。国鉄から満鉄へ移籍して十年有余を大石橋で過ごし、懐かしの生まれ故郷へ家族一同そろって無事帰れて夢のようだ。

大竹港に上陸してから両親家族には何の連絡も取り得ずして、乞食同様誠に見るも哀れな姿で五人の子供を連れて家にたどり着いた。うれしさいっぱいで家中へ入ると、両親や職人さんは私たち親子七人の姿を眺めてどこの乞食集団が家の中に入り込んで来たのかと、いかにも気味悪そうに後退して大変驚きの様子だ。思いもよらない突然の帰国で、両親に何の連絡もせずの帰宅で、無理もないことと思う。それが毎日毎日心配していた我が子が我が孫と分かると、汚い乞食に走り

寄り母は己を忘れて声を上げんばかりにポロポロ涙を流して抱きかかえ喜んでくれた。

両親のもとに帰り一年有余を過ごし国鉄に復職して両親と別居、五人の子供をかかえて苦難の生活が始まった。帰国してみるに内地の人々も戦後の苦境にあえぐ痛ましい姿を眺め、自分も負けてはならじと妻と力を合わせて身を粉にする思いで一生涯懸命働いた。その苦勞と努力が実を結び、国鉄では副参事に栄進がかなえられ無事定年退職が出来、また同時に国鉄請負会社の人事担当の要職に迎えられ、八年間を無事に勤続し二度目の定年時に東海ギフト連盟の事務局長に要請されて就任し、戦後の混乱期の中にあつて誠に幸運な半生期が得られた。

また三人の男の子、二人の女の子を妻と共に大陸から辛酸をなめて連れ帰ったが、皆それぞれ健康に恵まれ成長して、岐阜大学や早稲田大学に学ばせることが出来、二人の娘も他家に嫁ぎ、今、十二人の孫たちに囲まれ八十歳の老境を迎えて夫婦二人そろって共に静かに余生を過ごし得られるのも、長い人生航路をくじ

けず歩み続けた力強い内助の功もあってこそ、又子供たちも自分たち家族は引揚者で富も地位も無い家庭であることを自覚して、両親の胸中を熟知して努力してくれたたまものと、心に深く刻み常に感謝している。

【執筆者の横顔】

奥村氏は、商業学校を卒業し、胸をふくらまして国鉄職員として立ち働いていた。その当時の若人の学徒まで未開の大陸発展にあこがれる感情が旺盛をきわめていたので、奥村氏もそのたぐいの一人でもあった。

やがて希望していた満鉄から認められて満州鉄道(株)から招へいされた。両親は賛成しなかったが、どこで働くも国のためと説得し、国鉄を辞し神戸港出帆のとき、父は無言で奥村の手を握って見送ってくれた。昭和九年三月だった。女界灘をわたり大連の満鉄本社を訪ね、大石橋機関区勤務の辞令をうけた。

満州は最も氣候に恵まれたところである。

やがて、機関区から事務職に転じ社宅も割り当てられたので、妻と子供二人をよび寄せ家族四人安住でき

た。満州国の諸産業は年々発展の一途をたどる勢いであるところから満鉄の事業も拡大して多忙である。

昭和十八年四月、大石橋から大連埠頭勤務に転じた。二十年五月に入るや戦況は一挙に悪化し、八月十五日には日本敗戦、即満鉄瓦解、中国のものとなってしまった。奥村氏は単身で埠頭勤務していたので、何としても家族のもとへと死にものぐるいで大石橋の社宅についた。もう大石橋も、現地満州人が暴民化し日本人住宅を目指して略奪、暴行をあえて実行するという状況であるが、無抵抗の日本人としての敗戦国民の悲劇である。こうした中で、あるものを売り食い生活、満州人の雇用になって労賃を得るなどの生活で越冬した。昭和二十一年をむかえて、このまま大石橋におれば一家七人も死を待つばかりだと考え、七月四日、運を天にまかせて出発。八月七日、奉天で引揚げ第一陣の中にもぐり込んで錦州からコロ島に着き、收容所の馬屋同様のところに寝起きしながら食うや食わずの日をおくった。日本人同志がわずかばかりの食べ物盗んでなぐりあいの喧嘩をしている。正に地獄で

ある。ようやく乗船してはたはたとひるがえる日の丸の旗をみておのずと涙が流れた。八月二十七日、広島県の大竹港に上陸し奥村家族七人は乞食姿で故郷に着き、家族全員無事に引揚げてこれたと両親は喜んでくれた。

奥村氏はかつて国鉄職員時代の成績抜群だったこともあり直ちに復帰でき、そのまじめさと実力で副参事に栄進し重くもちいられた。

定年後老齢なのに東海ギフト連盟事務局長に就任している。子供らは岐阜大、早大を卒業それぞれ家庭をもち、二人の娘は嫁ぎ先で幸せ。

今日の幸せは妻の協力のおかげであると老妻をいたわりながら八十三歳でなお健康に恵まれている。一句「風雪流れて四十有余年、ここに幸あり」と結んでくれた。

(世引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

幼き日の思い出

愛知県 坂部 秘 一

海外へ

今ほもう空のかなたに、父孫市、母きり、兄兆貞、弟日志ひこしの四人と共に父の勤務先である東洋紡績が、当時の満州国安東市に工場建設を計画したため、建築関係の仕事に従事していた父と共に、家族五人海外へ移住した。私、現在五十七歳、福井県敦賀の東洋紡績株式会社の社宅で生まれたと聞いてはいるが、実際にその地は全く覚えていない。引揚げ後母の実家にあった写真より雪の上でスキー板を持って撮った四歳ぐらいの写真を見て知っているのみである。父の兄弟三人、母の兄弟五人ではとんだが、三河地方に住んでいたように聞いている。

家族五人異国の地に赴くことになってその兄弟たちは、皆寂しさを押さえて、送り出してくれたとのこと